

文献番号	年	出所	内容	文献の種類	文献の性質	予後の重篤性
5-6-6	1977 (S52)	織田敏次 「はじめに」 難治性の肝炎・肝内胆汁 うっ滞調査研究班 『厚生 省特定疾患 難治性の 肝炎・肝内胆汁うっ滞調 査研究班 昭和 51 年度 研究報告』 1977.	A 型肝炎の実態の一部が解明されたことに伴い、非 A 非 B 型肝炎が日本におけるウイルス肝炎の半数以上を 占めること、非 A 非 B 型肝炎には慢性化例が少なから ず認められ、難治性の肝炎に占める比率が高いことが 明らかになったことなどを記載	厚	原	●
5-6-7	1977 (S52)	鈴木宏 (東京大学第 1 内科), 三田村圭二, 平沢 堯 「非 A・非 B 型肝炎 の臨床的研究」 難治性 の肝炎・肝内胆汁うっ滞 調査研究班 『厚生省特 定疾患 難治性の肝炎・ 肝内胆汁うっ滞調査研 究班 昭和 51 年度研究 報告』 1977. p.68-70	輸血後肝炎が発生するという事は、非 A 非 B 型肝炎 ウイルスキャリアが存在することを示すものであり、 さらにその約 3 分の 1 が慢性化するということは、慢 性肝炎・肝硬変の成因の上でも大きな意義を有してい るといえると述べる。	厚	原	●
5-6-8	1978 (S53)	大林明 (東京都立駒込病 院感染症科), 原田英治 「輸血後肝炎と非 A・非 B 型肝炎」 診断と治療 1978;66(6); 23-27	結びにて、輸血後肝炎から B 型はほとんど淘汰され、 現在では 90%以上が非 A 非 B 型肝炎で占められてお り、この型の急性肝炎が遷延、慢性化しやすいという 点では、むしろ B 型肝炎よりも厄介な存在といえると 記載。	他	原	●
5-6-9	1978 (S53)	長山正四郎 (新潟大学医 学部内科) 「非 B 型輸 血後肝炎の臨床的検討 —潜伏期間と予後との 関連について—」 肝臓 1978; 19(8); 9-14	非 B 型肝炎 39 例について、肝生検によって検索した 成績では、持続性肝炎 17 例 (43.6%)、慢性肝炎 4 例 (10.3%)、すなわち 39 例中 21 例 (53.9%) が遷延 化及び慢性化し、B 型輸血後肝炎の遷延化及び慢性化 率 33.3% (9 例中 3 例) に比べて高値を示す傾向を認 めたことを記載。	学	原	●
5-6-10	1978 (S53)	小幡裕 (東京女子医科大 学消化器病センター内 科), 林直諒, 本池洋二 「肝硬変・肝がんとウイ ルス肝炎」 総合臨床 1978; 27(6); 1069-1073	肝硬変および肝がんの成因についての項目にて、慢性 肝炎から肝硬変への進展例はそれ程多いものではな く、約 10%前後とみなされていることを記載。	他	レ	○
5-6-11	1978 (S53)	鈴木宏 (東京大学) 「ウ イルス性肝炎の発症 (ウイルス性肝炎の A,B,C 型<特集>)」 臨床 科学 1978; 11(12); 1411-1418	著者がみた症例においては、輸血後非 A 非 B 型肝炎の 約 25%が慢性化したこと、肝炎の慢性化、肝硬変への 進展及び肝細胞癌の発生には、肝炎ウイルスの持続感 染が大きな役割を果たしていることを記載	他	レ	●
5-6-12	1978 (S53)	矢野右人 (国立長崎中央 病院消化器科) 「非 A・ 非 B 型急性ウイルス肝 炎」 Medical Corner 1978;(46);71-77	長期予後は B 型肝炎ほど進行性がなく、慢性肝炎非活 動型に落ち着くものが多いと推定されるが、10 年後、 20 年後の予後がどうなるかについては、今後の臨床家 に課せられた命題であるとの旨を記載。	他	レ	△
5-6-13	1979 (S54)	Rakela J, Redeker AG. Chronic liver disease after acute non-A, non-B viral hepatitis. <i>Gastroenterology</i> 1979; 77(6):1200-1202	非 A 非 B 型肝炎 45 例をプロスペクティブに追跡調査 したところ、18 例が急性肝炎症状の後少なくとも 1 年の間には肝機能数値の異常を呈し、18 例中 4 例が肝 生検により慢性活動性肝炎と診断されたこと、この 4 例中 1 例は、肝不全で死亡したが、検死において、肝 硬変に進展した慢性活動性肝炎であったことが判明し たことを記載。	学	原	●

文献番号	年	出所	内容	文献の種類	文献の性質	予後の重篤性
5-6-14	1979 (S54)	矢野右人(国立長崎中央病院消化器科),古賀満明,古河隆二「輸血後肝炎」臨牀と研究 1979;56(3);56-62	輸血後非 A 非 B 型肝炎の予後について、肝機能の点では、6 か月以上にわたり肝機能異常が持続したのは 71.4%であり、肝機能異常の遷延率は B 型肝炎に比較して明らかに高いこと、肝組織所見の点では、慢性肝炎活動型を経過する症例でも長期間の観察を行うと、大多数のものは慢性持続性肝炎又は慢性肝炎非活動型に移行し、B 型慢性肝炎のように活動性が経過とともに強くなり肝硬変へ移行する症例はみられないことを記載し、さらに、これらのことにより、輸血後非 A 非 B 型肝炎の長期予後は一般に良好と思われるが、肝硬変患者のレトロスペクティブ研究では、輸血歴を有する症例も多く、さらに 10 年以上にわたる長期観察での結論が要求されると述べる。	他	レ	△
5-6-15	1980 (S55)	大林明(東京都立駒込病院感染症科),原田英治「輸血後肝炎」外科診療 1980;22(8);959-963	B 型肝炎及び非 A 非 B 型輸血後肝炎の予後について、B 型肝炎の予後は良好であり、劇症肝炎にならない限り、完全に治癒するのに対し、非 A 非 B 型では、急性期の症状が軽く、検査でも軽症の例が多いにもかかわらず、約 30%以上が、6 か月を過ぎても、血清トランスアミナーゼ値の正常化をみないこと等が、諸家により報告されていること、著者の例でも、B 型輸血後肝炎は、6 か月以内に全例に肝機能の正常化がみられるのに対して、非 A 非 B 型肝炎では、遷延・慢性化が多いことを記載。	他	レ	●
5-6-16	1980 (S55)	織田敏次(東京大学第 1 内科)「ウィルス肝炎の研究-最近の動向」内科 1980; 46(2); 184-190	慢性肝疾患の約半数ないしは、それ以上が非 A 非 B 型肝炎と考えざるを得なくなること、肝硬変、肝癌は肝炎の終末像であるが、それは予言の域を出ず、実証するには長期にわたる経過の観察しかないことを記載。	他	レ	△
5-6-17	1980 (S55)	矢野右人(国立長崎中央病院消化器科),古賀満明「輸血後肝炎」内科 1980;46(2); 236-241	著者らが検討した輸血後非 A 非 B 型肝炎 56 例の 69.2%が慢性化し、血清トランスアミナーゼの異常が遷延することが同肝炎の特徴であること、肝組織像については、肝硬変に進展した例は、12 例中 1 例もなく、B 型慢性肝炎に比べて肝硬変への進展性は強くないことも特徴であることを記載。	他	レ	○
5-6-18	1982 (S57)	G. Realdi, et al. Long-term follow-up of acute and chronic non-A, non-B post-transfusion hepatitis: evidence of progression to liver cirrhosis. <i>Gut</i> 1982; 23(4); 270-275	開胸手術後に非 A 非 B 型輸血後肝炎を発症した 21 の症例を、その後 5 年以上追跡調査したところ、13 症例が慢性肝炎に進展したこと、13 例中 1 例は慢性持続性肝炎、2 例は慢性小葉肝炎、10 例は慢性活動性肝炎であり、10 例のうち 5 例は肝硬変を合併したこと、この結果から、急性輸血後非 A 非 B 型肝炎を発症した後に回復しない患者のうち相当数が肝硬変に進展し得ることを示していることを記載。	学	原	●
5-6-19	1982 (S57)	倉井清彦(東京大学医学部第 1 内科)ほか「HBs 抗原陰性肝細胞癌に関する臨床的研究」肝臓 1982;23(1);50-56	輸血を受けた時点から肝細胞癌発症までの年数は慢性肝炎、肝硬変に比べてその経過は長く、現時点で輸血後肝炎における肝細胞癌の発生率を評価することは難しいことが記載されている。	学	原	△

文献番号	年	出所	内容	文献の種類	文献の性質	予後の重篤性
5-6-20	1982 (S57)	清沢研道(信州大学第2内科)ほか「非A非B型慢性肝疾患における輸血歴の意義について」日本消化器病学会雑誌 1982;79(1); 46-54	プロスペクティブ研究とレトロスペクティブ研究を行った結果を報告した論文。プロスペクティブ研究では、最長3年8か月の組織学的観察期間の間に肝硬変進展例はなかったこと、レトロスペクティブ研究では、非A非B型慢性肝疾患406例中輸血歴を有していたのは154例(37.9%)で、その内訳は、慢性肝炎283例中121例(42.8%)、肝硬変70例中26例(37.1%)、肝細胞癌53例中7例(13.2%)で、B型の慢性肝炎116例中4例(3.4%)、肝硬変42例中3例(7.1%)との比較では有意に高率だったこと、および輸血歴を有する非A非B型慢性肝疾患中、輸血時から肝疾患までの診断時までの平均年数が慢性肝炎13.6年、肝硬変17.8年、肝細胞癌23.4年であったことを記載。	学	原	●
5-6-21	1982 (S57)	古田精市(信州大学第2内科),清沢研道,赤沢賢浩「輸血後非A非B型急性肝炎の長期観察」厚生省血液研究事業『昭和56年度研究報告集』1982. p.51-56	非A非B型輸血後肝炎は肝機能の面から見ると遷延例が多く、また長期にわたり遷延する例もみられるが、組織学的推移をみると肝硬変あるいは重症の慢性肝炎活動型への移行はなく、10年ないし20年以上の長期の観察がさらに必要であることが認識されたことが記載されている。	厚	原	△
5-6-22	1983 (S58)	古田精市(信州大学第2内科),赤羽賢浩,清沢研道「非A非B型肝炎の疫学的,臨床病理学的研究」厚生省特定疾患難治性の肝炎調査研究班『昭和57年度研究報告』1983. p.20-22	慢性肝炎に占める非A非B型肝炎の相対頻度はB型肝炎よりも高率であり本邦の慢性肝炎においては非A非B型肝炎が重要な位置を占めていることを記載し、これらの非A非B型肝炎中の約40%に輸血歴がみられることから、輸血後非A非B型肝炎が本邦の慢性肝炎の成因として大きな役割を果たしているものと考えられ、非A非B型慢性肝炎の進行は緩徐であるが、肝硬変、肝癌への進展、発生も稀ではなく、より長期の観察が重要であるとの旨を述べる。	厚	原	△
5-6-23	1984 (S59)	松浦寿二郎(広島大学付属病院輸血部)ほか「非A非B型急性肝炎の臨床的検討—輸血後肝炎を中心として—」肝臓 1984;25(8);13-18	現時点では、非A非B型肝炎では他の急性ウイルス性肝炎に比べ慢性化する確率は高く、この意味では予後は不良といい得ること、慢性化後の長期予後についてはB型肝炎に比べて比較的安定しており、その進行も緩徐である点から良好である可能性が示唆されること、Realdiらは、肝硬変への進展例を報告しており、非B型肝炎硬変には輸血歴を有する症例が多いことも事実であり、この点の解明には、さらに長期間のprospective studyの結果を待たねばならないことを記載。	学	原	△